

「バックラッシュ」言説のレトリック分析

——保守系論壇誌『諸君！』における反フェミニズム言説の変遷——

林原 玲洋

1 序論：課題の設定

本稿では、ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬が生じやすい環境として、反フェミニズム言説をとりあげる。

T. J. Mertz によると、「反フェミニズム」とは、フェミニズムに対する反動（リアクション）、つまり、「男性優位に対する批判を認めず、男性優位を消し去ろうとする努力に抵抗する（そもそも変化が可能であるという考えもしばしば却下する）」ものであり、「フェミニズムを欠いたところに存在しうるその他の関連概念、つまり、女性排斥主義・性差別主義・女性嫌悪・家父長制・男性中心主義などから区別」（Mertz 2005: 95）される。その起源は、『女性の権利の擁護』で知られる M. Wollstonecraft の思想と行動を「非道徳的」と非難した保守派の論者にまでさかのぼることができるという。

近年の日本において、最も流布した反フェミニズム言説は、2000 年代前半に保守系の媒体を通じて広まった「バックラッシュ」言説、つまり、「男女共同参画」「ジェンダーフリー」「過激な性教育」バッシングであろう。

「バックラッシュ」という用語は、リベラルからみた保守のリアクション（反動）一般を意味するため、たとえば、人種差別の分野でも用いられる（積極的格差是正に対するバックラッシュのように）。フェミニズムの分野でこの用語を広めた S. Faludi も、かなり広義に用いているが（Faludi 1991=1994）、本稿では、2000 年代の日本に特徴的であった反フェミニズム言説を、とりわけ「バックラッシュ」言説と呼び分けることにする。

「バックラッシュ」言説の特徴としては、「組織的な攻撃」（伊田 2006: 176）であることが、しばしば指摘されてきた。以下のようなアクターが連携して、ソースの不明確な伝聞を相互に引用しあうことで、「ジェンダーフリー」や「過激な性教育」の〔しばしば実態に反する〕問題を喧伝し、行政に対する陳情を動員したというのである。

- マスメディア：フジサンケイグループ『産経新聞』『正論』、文藝春秋『諸君！』
- 政治団体：日本会議『日本の息吹』、日本女性の会、日本政策研究センター『明日への選択』、新しい歴史教科書をつくる会
- 宗教団体：新生佛教教団『日本時事評論』、世界基督教統一神霊協会・国際勝共連合『世界日報』『思想新聞』『世界思想』
- 知識人：林道義・高橋史郎・八木秀次・西尾幹二・長谷川三千子
- 政治家：安倍晋三・高市早苗・山谷えり子・西川京子

一方、「バックラッシュ」言説の担い手に聞き取り調査をおこなった山口智美らは、その運動を「組織的」なものとして描くことについて、つぎのように述べている。

保守運動とフェミニズム運動の対立は、あわせ鏡のような構図だった。フェミニズムを「共産主義」「男女同質化」「フリーセックス」とレッテル貼りする保守運動に対し、フェミニズムもまた、保守運動に「新自由主義」「新保守主義」「反動」とレッテルを貼っていく。両者とも互いを「敵」として捉え、議論や対話を重ねるためではなく、それぞれの業界向けの動員の言葉として、これらのレッテルを振りかざしていく。そこでは、実態を表した適切な表現ではなく、流言に等しい表現が多く氾濫した。保守運動が「過激な」とくくる言葉は、一部の事例や存在しない事例を、あたかもフェミニズムの本質的な意図であるかのようにみせるレトリックとして機能した。一方でフェミニズムが保守運動批判に使う「新自由主義」は、政策論点の細部を多い隠し、ひとまずの大きな風潮を批判してみせるという便利なマジックワードとして機能していた。（山口ほか 2012: 328）

これは、「バックラッシュ」言説の担い手を、実証研究を欠いたまま一枚岩の勢力として描いた、フェミニストやジェンダー研究者に対する〔自省を込めた〕批判になっている。とはいえ、一枚岩の勢力として自らを構成することは、ほかならぬ「バックラッシュ」言説の担い手自身にとっても実践的な課題であった。たとえば、「新しい歴史教科書をつくる会」の内紛によって、のちに西尾幹二と袂を分かつことになる八木秀次は、西尾との共著において以下のように述べている。

……本書で論じた「ジェンダーフリー」も「過激な性教育」も、その背景にある人物や思想は、歴史教科書を自虐的にした勢力とぴったり同じである。敵は同じなのである。その意味では、われわれ二人〔西尾・八木〕がこの問題に携わるのには必然性があると言っていい。（西尾・八木 2005: 10-11）

そこで、本稿では、むしろ山口らの批判を出発点として、あらためてつぎのように問うことにしたい。それは、その担い手が多様であるにもかかわらず、「バックラッシュ」言説が一枚岩の勢力として自らを構成し得たのはどのようにしてなのか、とりわけ、その構成にあたり、保守論壇がどのような機能を果たしたのか、という問いである。本稿では、この問いに、「バックラッシュ」言説の一翼を担った保守系論壇誌である『諸君！』の通時的分析を通じて取り組むことにする。

2 『諸君！』の誌面を構成するトピック

本論に入るまえに、『諸君！』というメディアの特性を確認しておこう。

雑誌記事索引としてよく利用されるデータベースには、①「国立国会図書館雑誌記事索引」（以下「雑索」）と、②「大宅壮一文庫雑誌記事索引」（以下「大宅」）がある¹⁾。本研究にあたり、両データベース（いずれもウェブ版）における『諸君！』収録記事の採録状況を確認したところ、「雑索」には9,764件、「大宅」には8,022件（2013年10月現在試験的に公開されている古いデータ5,183件とあわせると13,205件）の登録があった。

「雑索」のデータには件名が付与されていないため、収録記事をその内容によって検索することができない（表題に検索語が含まれていなければ、該当する記事を見つけること

ができない)。そのため、雑誌の内容を概観するには、件名が付与されている「大宅」の方が使い勝手がよい。だが、残念ながら「大宅」の場合、採録の対象になっていない巻号がしばしばあり、かならずしも網羅的ではないようである。また、いずれにせよ読者欄の投稿は、両データベースとも採録していない。

そこで、まずは、①1980年1月号(12巻1号)から2009年6月号(最終号)の約30年分(354冊)の『諸君!』の収録記事について、②「雑索」のデータを実際の目次と照合しながら整理しつつ、③同範囲の巻号について、全ての読者欄の投稿をデータベース化する作業をおこなった。『諸君!』の創刊は1969年7月なので、1970年代が丸々抜けていることになるが、作業量の都合から今回は断念した。同期間における収録記事の総数は5,272件、投稿の総数は2,298件となった²⁾。

つぎに、すべての記事のリードを目次で確認しながら、それぞれの記事に件名を付与する作業をおこなった。件名の付与にあたっては、保守論壇からみて批判の対象となる国・地域・集団・人物に着目した。すべての記事について本文を確認したわけではないので、この分類は予備的なものにとどまるが、それでも一定の傾向を読み取ることはできる。

図1は、アメリカ・ヨーロッパ(イギリス・フランス・ドイツが中心)・ロシア(ソビエト連邦を含む)・中国(台湾や香港を含む)・韓国・北朝鮮に関わる記事件数(合計1,838件、全体の約35%)の推移をあらわしたものである³⁾。アメリカが一貫してトピックになる一方、東西冷戦の終結にともなってロシアは後景に退き、代わりに中国に関する記事が急増している。また、小泉純一郎元総理の訪朝(2002)を受けて、北朝鮮に関する記事も急増していることがわかる。

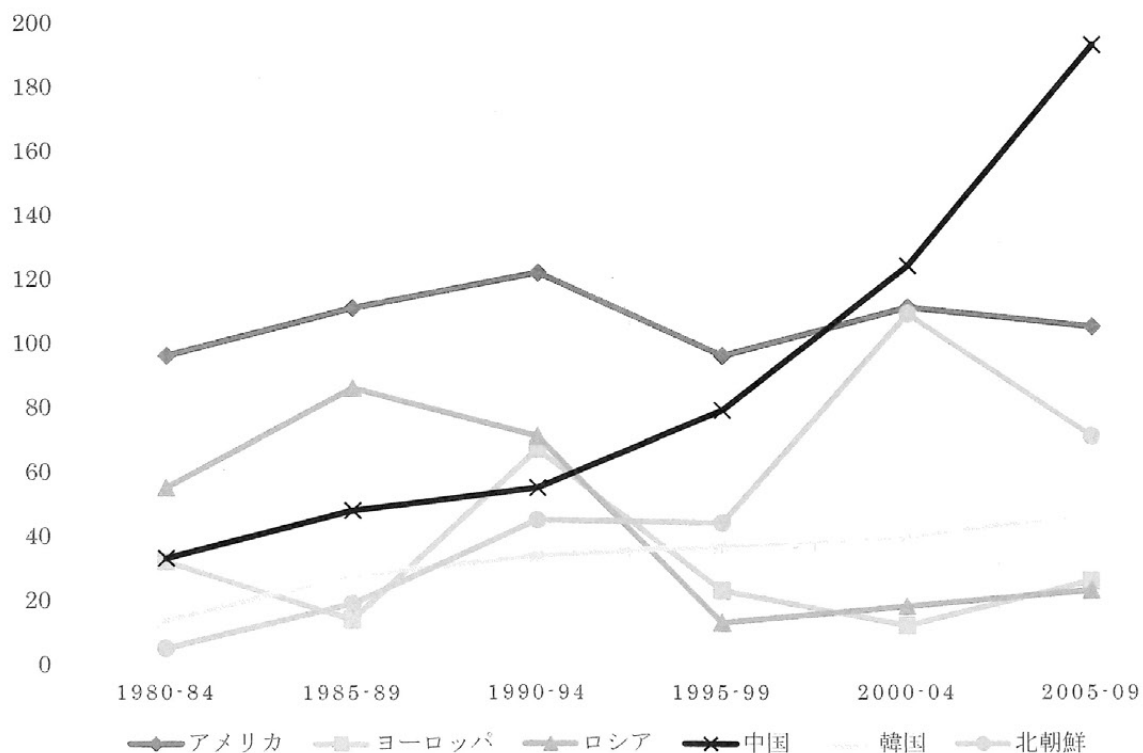


図1 『諸君!』誌面構成の推移(国際政治)

図2は、自民党・公明党（創価学会を含む）・社会党（社民党を含む）・共産党、および、新党（細川連立政権に至る新党ブームから新進党を経て民主党の台頭までを含む）と官僚（裁判官・警察官・自衛隊を除く）に関する記事数（合計647件、全体の約12%）の推移をあらわしたものである⁴⁾。自民党が一貫してトピックになる一方、非自民連立政権が成立した1993年から1994年の前後にはその記事数が落ち込んでいる。ときの政権や行政に関連して記事数が増減していることがわかる。

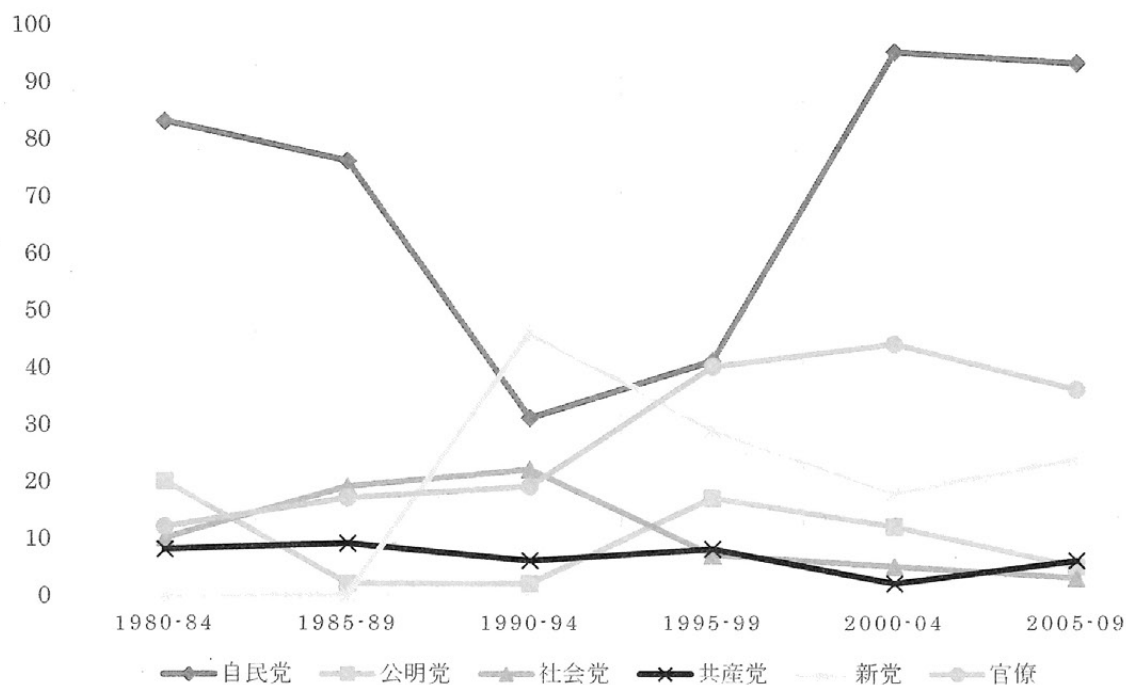


図2 『諸君！』誌面構成の推移（国内政治）

いずれも、国内外の情勢を反映して、1990年代にトピックの構成が大きく変化したことを示しているといえるだろう。その創刊の経緯（上丸 2011）から「反共イデオロギー」の雑誌であると捉えられがちな『諸君！』だが、記事数の推移をみる限り、その誌面は時事問題を反映した構成になっており、共産主義（社会主義国や共産党・社会党）批判に終始していたわけでは、必ずしもないことがわかる。

3 『諸君！』におけるフェミニズム関連記事

それでは、『諸君！』におけるフェミニズム関連記事をみていこう。

全体を通じて目立つのは、著名な人物をその性別と関連づけて揶揄する、一種のミソジニー（女性嫌悪）記事である。典型的には、社会党（社民党）の女性議員に対する以下のような記事が、これにあたる（最初の記事は、いわゆる「マドンナ」議員を批判したものである）。

- 徳岡孝夫「魔女たちの祭典」1989年9月号。

- 加瀬英明「オバタリアンの恥を世界に晒した土井たか子」1991年3月号.
- 高市早苗「いつまで『乙女の祈り』やってんのよ!」2002年1月号.

また、女性の生活（そのライフスタイルやセクシュアリティ）に関する「覗き見」的な記事も散見される．たとえば、以下のような記事である．

- 久田恵「女性誌最前線に行く」1996年12月号～1998年5月号（連載）.
- 谷崎光「女の園を往く：てなもんや探検隊」2000年2月号～2001年1月号（連載）.
- 香山リカ×さかもと未明〔対談〕「ミレニアム大性談：『自立した女』の奥の院」2001年2月号.

これらの記事もフェミニズムに無関係というわけではないだろうが、今回は分析対象から除外することにした．選定基準としては、①「大宅」において「男女平等」「女性（婦人）問題」「女性（婦人）解放運動」の件名が付与されているものを基本としたうえで、②2000年代の「バックラッシュ」言説を拾うため、「ジェンダー〔フリー〕」「男女共同参画」に関する記事を（性教育についてのみ主題的に論じた記事はなかった）、また、③1990年代以前の反フェミニズム言説を拾うため、「働く女性（女性の社会進出）」「少子化」「フェミニズム」「夫婦別姓」に関する記事を追加した⁵⁾．表1はこの基準に該当する記事（合計73件、約1.4%）を、読者欄における反応の有無とあわせて整理したものである．定義上、これらの記事のすべてが「反フェミニズム」言説にあたるわけではないので、注意してほしい．

なお、本稿では、「慰安婦」関連記事（合計29件、約0.6%）を別集計とした．先行研究のなかには、「慰安婦」に関する新聞記事を、「バックラッシュ」に数えているものもある（和田・井上 2010）．たしかに、「アジア女性基金」や「女性国際戦犯法廷」に言及する記事の場合、たとえ表題やリードでは触れていなくても、本文では「フェミニズム」や「フェミニスト」という語が用いられていることがある．だが、史実や歴史教科書に焦点をあてた記事の場合、本文を読んでもこれらの語は用いられていない．

図3および図4は、比較のため、しばしば保守論壇と対立する「朝日新聞」に関連する記事（合計188件、約3.6%）件数の推移とあわせて⁶⁾、フェミニズム関連および「慰安婦」関連の記事件数の推移を示したものである．

『諸君!』誌上における「バックラッシュ」言説の展開は、2002年～2006年の大きな山に反映されている．先行研究では、2006年を境に「バックラッシュ」言説が退潮したことが指摘されているが（山口ほか 2012: 36）、『諸君!』もその動向に同調していたといえるだろう．なお、2004年が0件となっている背景としては、同年4月に内閣府が「ジェンダーフリー」という言葉を使用しないという通達を出したこと、また、同年から女性天皇の是非が問題になり始めたことがあげられる．

では、2000年代の「バックラッシュ」言説にいたるまでに、『諸君!』におけるフェミニズム関連記事のトピックは、どのように推移したのだろうか．図4からは、大小あわせて4つの山を見てとることができる（「バックラッシュ」言説は、第5の山にあたる）．

表1 『諸君!』におけるフェミニズム関連記事と読者欄の反応

巻号	著者	表題	読者欄*
1 1984 5	屋山太郎	「男女雇用平等法」は日本を潰す	
2 1984 6	森山真弓	屋山太郎氏への手紙	
3 1984 7	長谷川三千子×森山真弓	「男女雇用平等法」は日本を潰す!?	辛い読み物
4 1985 6	吉原敦子	スカートをはいた高級官僚たち	女性官僚たちに望む 燃える女への警告 女は社会進出すべき 男女は平等なのか 読者の声に耳を傾けよ ※専業主婦もすてたものでは…… 千葉敦子氏の思い出 専業主婦の可能性に注目されたし もうひとつの「女性論」を 「女性社会進出論」への疑問 ※専業主婦の重要性を見直して ※「働く女性」賛美ムードの危険
5 1986 5	千葉敦子	ニューヨークの燃える女たち	
6 1986 7	吉原敦子	女性エリートと男性ダメ社員	
7 1986 8	江坂彰	女性をうまく使う会社が伸びる(「戦略的経営論」の時代:8)	
8 1986 9	米沢富美子ほか	日本が変わる最先端の女たち	
9 1989 5	山口令子	フェミニズムに未来はあるか	
10 1989 6	大淵寛	DINKSが国を亡ぼす	
11 1989 12	大塚英志	上野千鶴子における「幼児性」の研究	
12 1990 1	澤田昭夫	呪術師たちの饗宴	
13 1991 1	山下悦子	上野千鶴子は女を救えるか	
14 1991 8	渡部昇一	「伝統の寿命」とは何か:夫婦別姓論と出生率	
15 1991 10	井上章一×佐伯順子	フェミニズムはなぜ美人が嫌い	
16 1992 1	澤田昭夫	フェミニズムの「魔性」	
17 1993 2	山下悦子	雇用均等法より高群逸枝の「根性」を! (日本近代史の誰に学ぶか:リーダーなき「平成」を撃つ24人) 福島瑞穂弁護士「夫婦別姓論」はどこまで変だ(この20の言動に異論あり)	忘れられる「高群逸枝」
18 1994 2	杉原誠四郎	福島瑞穂弁護士の「夫婦別姓論」はどこまで変だ(この20の言動に異論あり)	
19 1994 11	上野千鶴子×大塚英志	「戦後民主主義」と「松田聖子」	上野・大塚両氏のズレ
20 1995 2	上野千鶴子	連合赤軍とフェミニズム	
21 1995 9	大塚英志	オウムの女たち	
22 1996 3	八木秀次	夫婦別姓は社会を破壊する	夫婦別姓は観念遊戯 別姓論とエゴイズム
23 1996 7	加地伸行	夫婦別姓こそ前世紀の遺物	
24 1996 7	高山正之	三菱アメリカ「セクハラ疑惑」を洗いなおす	夫婦が対等であるには
25 1996 9	佐藤正明	中村「院政」が泥沼化させた三菱セクハラ事件	
26 1996 10	宮崎哲弥	人工中絶は母親の権利ではない	
27 1997 4	加地伸行	寿国債で「少子化日本」は再建できる	
28 1997 10	中川八洋	夫婦別姓論者の「下心」	
29 1998 2	宮崎哲弥	福島瑞穂:知力の乏しいシンボリックモドキ神 (怪しげな「言説の流布」に警鐘乱打 この20人を大論破!)	怪しげな言説を論破
30 1998 5	古森義久	第一線女性研究者たちの日本観	
31 1998 6	鈴木光司×林道義	種の保存と父性の復権	「父性の復権」のために 山田論文に親子で納得
32 1998 8	山田昌弘	これを「少子化不況」となぜ言わぬ	
33 1998 9	林道義	「主婦」の復権	
34 1998 11	八木秀次	揉み手までして「子を産んでくれ」のアホらしさ	経済同友会の脳天気
35 1999 4	長谷川三千子	まだ言ってるの「男女平等」って	
36 1999 6	大塚英志	(フェミニズムのようなもの)(ぼくと宮崎の'80年代:19)	
37 1999 6	林道義	こんなバカやってるフェミニズム	子育てしない女を……
38 1999 7	林道義	フェミニズムの害毒	
39 1999 8	田中喜美子	フェミニストから林道義氏へ	妻であり母であること
40 1999 9	林道義	ウソで塗り隠した田中喜美子氏の「暴論」	
41 1999 10	田中喜美子	林道義氏をあわれむ	
42 1999 11	出久根達郎	共働き(言の葉のしずく:51)	
43 1999 12	小谷野敦	「もてない男」の売買春論	
44 2000 3	八木秀次	「フェマルキスト」が歪める少子化対策	マルキストは知らない 土俵に固執する必要なし 「賢い人間」たれ 長州・山口を憂う ※ぜひ「バーク」研究会を
45 2000 5	加瀬英明ほか	土俵に上がったがる女たちへ	
46 2000 7	林道義	ファシズム化するフェミニズム	
47 2000 12	高橋英之	少子化ニッポンは「農園都市国家」を目指せ	
48 2001 1	八木秀次	「男女共同参画法」なんてカルトじゃないか	
49 2002 2	八木秀次	夫婦別姓(日本を覆う「怪しい言葉」群22)	
50 2002 3	高市早苗×西川京子×山谷えり子	ネコ撫で声の「男女平等」に騙されるナ! クタバレ「夫婦別姓」	
51 2002 4	泰郁彦	わがまま族の暴走を許すな! 何をキンキン「夫婦別姓」	
52 2002 4	小谷野敦	キャンパスに吹き荒れるセクハラ春嵐	
53 2002 6	高橋史朗	ファロスを磨いて国立たず	禍根を残すジェンダー
54 2002 8	石井英夫	愚かなるジェンダーフリー(アンケート 知恵の20柱)	
55 2002 12	千葉展正	千葉「ジェンダー・フリー帝国」の夢、潰(つい)ゆ	
56 2003 2	米田建三	男女共同参画法の誤用:子供に子供の作り方を教える愚 (ならぬことはならぬものです)	
57 2003 4	林道義×山谷えり子	家族崩壊を許すな	家族崩壊の恐ろしさ
58 2003 4	西村眞悟	「反日」と「伝統敵視」(救国の一灯:3)	
59 2003 8	林道義×富田和巳×有村治子	家庭が脳を育てる	新しい女性の生き方
60 2003 8	上野千鶴子×渋谷知美	東京大学発「童貞」応援歌	男と女の真実
61 2003 12	八木秀次	ジェンダー「スーパーフリー」という妖怪	
62 2005 3	西尾幹二	上野千鶴子:羞恥心を喪失したフェミニスト(言論界の「善男善女」)	朝日読者だけど…… 中山文科相の意欲に期待 ゆとりと学力のバランスを
63 2005 5	中山成彬×細川珠生	中山文科相、不退転の覚悟 学力低下 国旗・国歌 ジェンダーフリー 教育基本法	
64 2005 7	生島佳代子	究極の少子化対策:一人産んだら一律「一千万円」減税	
65 2005 12	小谷野敦×仲正昌樹×八木秀次	この世の嫌われモノをどうする! タバコ・フェミニスト・監視カメラ・人権擁護法案	
66 2006 2	稲田朋美×高市早苗×山谷えり子	私たちは小泉チルドレンに非ず! 目標は和製サッチャーよ	女性議員にパワーをもたらす
67 2006 2	仲正昌樹	北田曉大に告ぐ「諸君!」に出て何が悪い	
68 2006 7	林道義	理念なき「教育基本法改正案」は破棄せよ	
69 2006 11	泰郁彦	「男女共同参画法」を夢想したジェンダー女帝たちの相関図	
70 2006 12	桜井裕子	財界オジンは何故ジェンダーに甘いのか	
71 2006 12	山下悦子	専業主婦はニートでもパラサイトでもありません	
72 2006 12	夏目幸子	フランスではとくにアンチ・フェミニズム	
73 2007 3	石原慎太郎×義家弘介	子供を守るための七つの提言	親こそ教育の最高責任者

*米印(※)は間接的に反応している投稿。

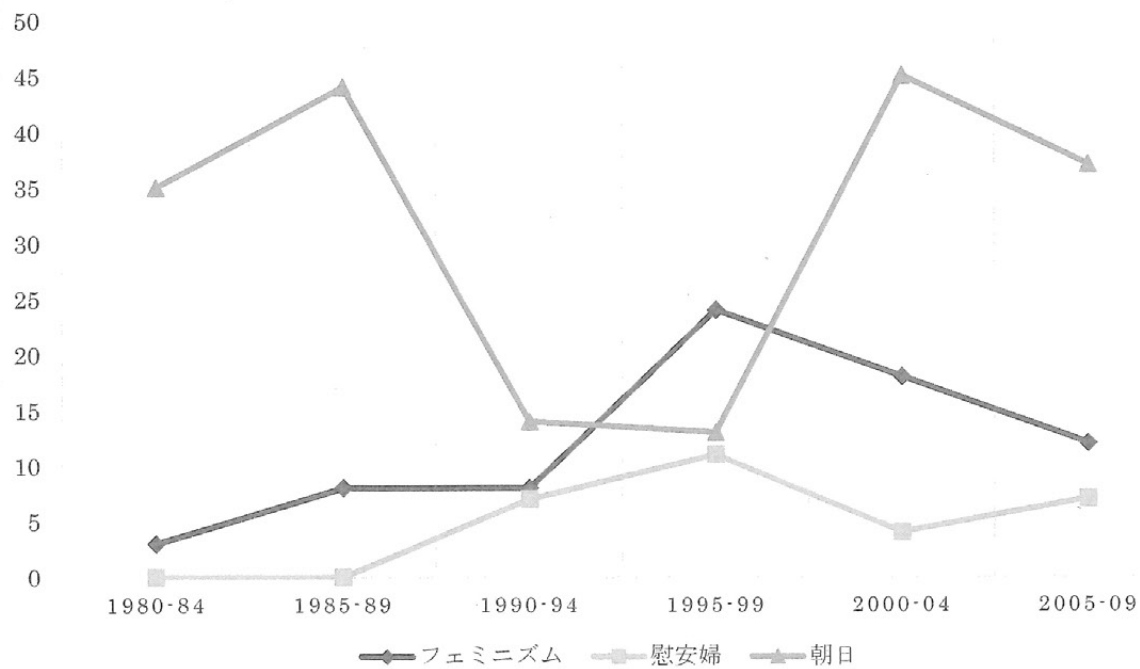


図3 『諸君!』におけるフェミニズム／「慰安婦」関連記事の推移（五年単位）
（付・「朝日新聞」関連記事の推移）

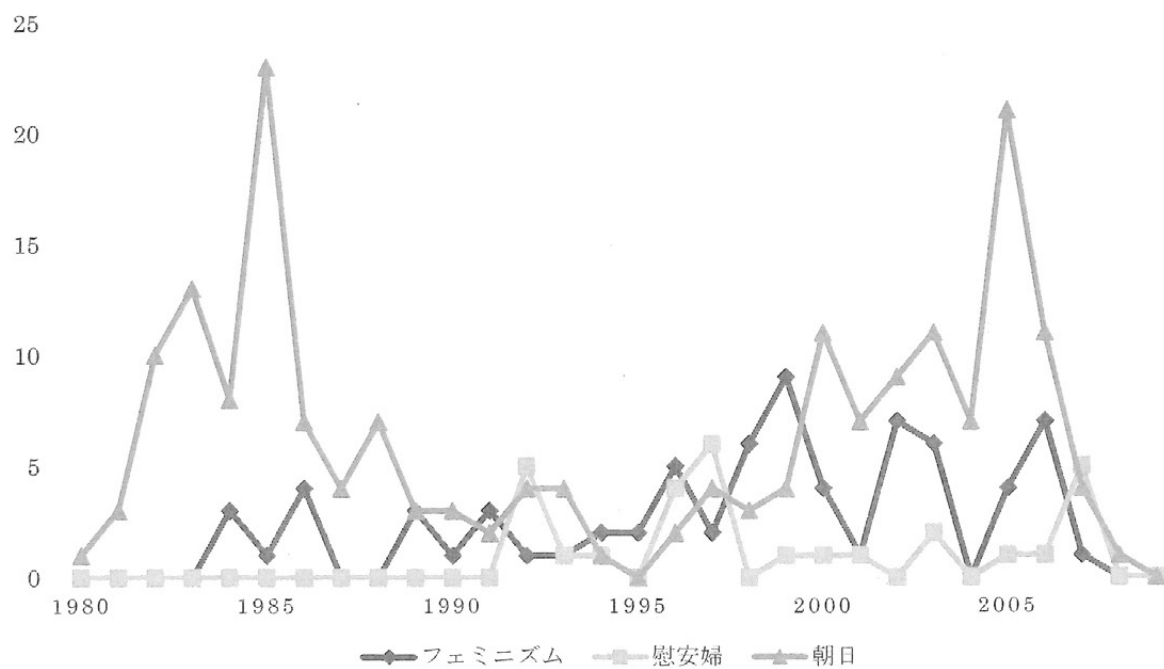


図4 『諸君!』におけるフェミニズム／「慰安婦」関連記事の推移（一年単位）
（付・「朝日新聞」関連記事の推移）

第1の小さな山は、1985年前後である。まずは、男女雇用機会均等法の制定（1985）にともない、以下の誌上論争がおこなわれる。

- 屋山太郎『男女雇用平等法』は日本を潰す」1984年5月号。
- 森山真弓「屋山太郎氏への手紙」1984年6月号。
- 長谷川三千子×森山真弓〔対談〕『男女雇用均等法』は日本を潰す!？」1984年7月号。

その後、以下のような記事において、「働く女性」「エリート女性」に焦点があたるようになる。これらは必ずしも反フェミニズム言説にあたらないが、読者欄では「働く女性」に批判的な反応が多い。

- 吉原敦子「スカートをはいた高級官僚たち」1985年6月号。
- 千葉敦子「ニューヨークの燃える女たち」1986年5月号。
- 吉原敦子「女性エリートと男性ダメ社員」1986年7月号。
- 江坂彰「女性をうまく使う会社が伸びる」1986年8月号。
- 米沢富美子ほか「日本が変わる最先端の女たち」1986年9月号。

第2の小さな山は、1990年前後である。1989年の参院選でいわゆる「マドンナ」議員が誕生していることを背景に、前述のミソジニー記事とともに、女性の社会進出の「弊害」に焦点をあてる、以下のような反フェミニズム言説が登場する。なお、山口論文は、今回確認した範囲では、表題に「フェミニズム」が含まれる記事の初出であった。

- 山口令子「フェミニズムに未来はあるか」1989年5月号。
- 大淵寛「DINKSが国を亡ぼす」1989年6月号。
- 澤田昭夫「呪術師たちの饗宴」1990年1月号。
- 山下悦子「上野千鶴子は女を救えるか」1991年1月号。
- 渡部昇一「夫婦別姓論と出生率」1991年8月号。

山下論文にみられるように、この時期以降、上野千鶴子がフェミニストの代表として言及されるようになる。じつは、上野をトピックとする記事の初出は大塚英志（1989年12月号）なのだが、大塚は上野に好意的な立場で書いており、のちに『諸君!』誌上にも両者の対談『戦後民主主義』と『松田聖子』が掲載されている（1994年11月号）。また、連合赤軍に関する大塚の論文を受けて、上野自身も「連合赤軍とフェミニズム」（1995年2月号）という論文を寄せている。

第3のすこし大きな山は、1996年前後である。同年2月には、選択的夫婦別姓を含む「民法の一部を改正する法律案要綱」が法制審議会によって答申され、他のメディアでも批判が展開されていた（八木・宮崎編 1996）。『諸君!』誌上でも、以下のように、反・夫婦別姓論が展開される。同じ時期には、セクハラや人工妊娠中絶をトピックとする記事もみられるのだが、断続的なものにとどまっており、読者欄も反応していない。

- 杉原誠四郎「福島瑞穂弁護士の『夫婦別姓論』はどこか変だ」1994年2月号。
- 八木秀次「夫婦別姓は社会を破壊する」1996年3月号。

- 加地伸行「夫婦別姓こそ前世紀の遺物」1996年7月号.
- 中川八洋「夫婦別姓論者の『下心』」1997年10月号.

第4の大きな山は、1999年前後である。この年に記事件数が増えているのは、『主婦の復権』を著した林道義によるフェミニズム批判（林 1998）に、『「主婦の復権」はありうるか。』を著した田中喜美子（田中・鈴木 1999）が応じ、誌上論争になったことが大きい。だが、それらを除いて考えても、少子化をトピックとする以下のような記事が、この年の前後に登場している。なお、八木の少子化論には、すでに「ジェンダーフリー」批判が含まれており、その「反共」の言説形式（次節を参照）とあわせて、「バックラッシュ」言説の先駆けとみることができる。

- 山田昌弘「これを『少子化不況』となぜ言わぬ」1998年8月号.
- 八木秀次「揉み手までして『子を産んでくれ』のアホらしさ」1998年11月号.
- 八木秀次『「フェマルキスト」が歪める少子化対策」2000年3月号.
- 高橋英之「少子化ニッポンは『農園都市国家』を目指せ」2000年12月号.

1990年代は、いわゆる「1.57」ショック（1990）を受けて、少子化対策が政府の施策となっていく時期であった。すでに1994年には、「エンゼルプラン」が発表されていたが、1999年は、「固定的な性別分業の是正」を盛り込んだ「少子化対策推進基本方針」「新エンゼルプラン」が発表された年でもある。

ところで、1999年は、「男女共同参画社会基本法」が施行された年でもあるのだが、『諸君！』の執筆陣はこれを見過ごした（長谷川三千子は法案の段階で言及しているが、賛否ないまぜの議論になっており、「バックラッシュ」言説のような批判は展開していない）。

「男女共同参画」に対する批判が広まったのは、地方議会において男女共同参画条例を制定する動きが広まった2002年前後のことであった。第5の大きな山、つまり、「バックラッシュ」言説の登場である。

以上をまとめると、『諸君！』におけるフェミニズム関連記事のトピックは、図5のように推移したことになる。



図5 『諸君！』におけるフェミニズム関連記事の推移

4 「バックラッシュ」言説のレトリック

1992年から2009年までの『産経新聞』について、「バックラッシュ」言説にあたる記事の分析をおこなった和田悠と井上恵美子(2010)は、1996年に「夫婦別姓」を含む記事件数が、そして、2003年に「男女共同参画」「ジェンダー」を含む記事件数が、それぞれピークを迎えていたことをあきらかにしている。また、かれらはこの過程を、反・夫婦別姓論において『『伝統的』な家族の価値が浮上し、それが歴史問題としての日本軍『慰安婦』問題に連なるものとして位置づけられ』(和田・井上 2010: 75)た結果、「男女共同参画」「ジェンダーフリー」バッシングへと展開したと解釈している。

記事件数の推移としては、『諸君!』も同様の過程を経ているが、『『伝統的』な家族』のような保守的な価値が浮上するのは、1996年以降に固有の現象ではない。たとえば、男女雇用機会均等法を批判した長谷川三千子は、同法が「文化の生態系を破壊する」(長谷川 1984)として、『諸君!』の対談においても、伝統的な男女の役割や専業主婦の価値を擁護している。

保守論壇が自らの主張を理由づけるため、保守的な価値に訴えるのは、いわば当然のことである。そのため、立論の形式(自らの主張をどのように理由づけるのか)に着目しても、「バックラッシュ」言説の特性をとらえることはできない。そこで、立論の形式ではなく、反論の形式(論敵の主張をどのように批判するのか)に目を転ずることにしよう。

「バックラッシュ」言説における反論の形式として、先行研究でも指摘されているのは、「反共」の言説形式である。たとえば、山口らは、2005年前後に数多く出版されたフェミニズム批判本に、以下のような「共通するフォーマット」があることを指摘している。

それまで反復されてきた「反共(反□共産主義)」の言説上にジェンダーフリーを位置づけつつ、現状が悪いのは、現状を悪くさせている「誰か」がいるからであり、排除すべきだという思考パターンに基づき、その「誰か」にその都度の固有名詞を入れることで、問題提起の対象を指示している。(山口ほか 2012: 28)

『諸君!』における「バックラッシュ」言説も同様の形式をとるものは多い。いくつか引用してみよう。

平成十一年六月に施行された「男女共同参画社会基本法」(以下「共参法」と略称)は、きわめて危険な思想を隠し持っている、希代の悪法と言うべきである。それは絶対平等の共産主義思想をもとにしており、かつファシズム的な権力統制への道を用意するものである。(林道義「ファシズム化するフェミニズム」2000年7月号, p. 88; 下線筆者)

「男女共同参画」とは以上のように思想的には、社会主義・共産主義に由来する、家族を敵視し、性別を嫌い、性の自由化を主張するカルト(擬似宗教)的な社会の実現を望む人々の特殊な考えである。(八木秀次『『男女共同参画法』なんてカルトじゃないか』2001年1月号, p. 201; 下線筆者)

「ジェンダーフリー」を叫ぶ空虚な“紅衛兵”たちは、更衣室、便所の「男女共用」を唱え、配偶者特別控除を廃止し専業主婦を追放しようとしている！（西村眞悟『反日』と『伝統敵視』2003年4月号、p. 234；下線筆者）

それでは、「バックラッシュ」言説の特性は、「反共」の言説形式にあると考えてよいのだろうか。

「反フェミニズム」の定義にあたり、冒頭で引用した Mertz は、「世界大戦に続いて生じた反共産主義運動は、フェミニストと共産主義者の間の、しばしば取るに足りない結びつきを利用して、両者を非難した」（Mertz 2005: 95）と述べている。じつは、『諸君！』のフェミニズム関連記事においても、「反共」の言説形式は、「バックラッシュ」言説が初出というわけではない。「マルクス主義フェミニズム」で知られる上野に対する批判は除くとしても、たとえば、以下のような記事が、「反共」言説に該当する（第1の山については、明確に該当するものがなかった。ただし、屋山論文は労働組合を引き合いに出している）。

■第2の山：フェミニズム

……私があえてフェミニズム批判に踏み切るのは、今やフェミニズムが常識的男女同権論をはるかに逸脱して、政治、経済、社会、文化、宗教のあらゆる分野にわたる、静かなソフトの、しかし極めて重大な、人類文明を根源から覆すような文化大革命を世界的規模で惹き起こしつつあるからである。特に、二十世紀のメシアニズムたるニューエイジ運動とネオ・マルクシズムと結合したフェミニズム、それが垂れ流す精神的公害たるや、言語に絶するものがあるからだ。（澤田昭夫「フェミニズムの『魔性』」1992年1月号、p. 221；下線筆者）

■第3の山：夫婦別姓

今日「夫婦別姓」をキャンペーンする女性弁護士たちは、「結婚を変え、家族を変え」とカムフラージュしながらその実、マルクス主義的な家族解体運動を展開している。（中川八洋「夫婦別姓論者の『下心』」1997年10月号、p. 160；下線筆者）

■第4の山：主婦・少子化

……フェミニストたちはよく「家族は支配関係だ」と言う。家族を支配、被支配という関係でしか見られないのが、フェミニストの特徴である。

支配関係で見ても、「その支配をなくして平等になりましょう」と言うのならまだ賛成できるが、とにかく支配関係で見る人に限って、支配をくつがえして、今度は自分が支配者になろうとするものである。ちょうどマルクス主義者が、ブルジョアジーの支配を転覆して、プロレタリアートの支配を確立しようとしたように、支配・被支配の関係で見る者は、支配・被支配の構造からいつまでたっても逃れられないものである。（林道義「こんなバカやってるフェミニズム」1999年6月号、p. 221；下線筆者）

……この「少子化社会対策基本法（案）」は明確にフェミニズムのイデオロギーに基づいている。またその淵源はマルクス主義にある。そしてこの法案の眼目は出産と育児の奨励という文字通りの少子化対策にあるのではなく、「環境」を「整備」しなければ女性は子供を産み育て

ないぞと脅しをかけ（ストライキ権の行使！）、少子化を利用してフェミニズムの発想に基づいて社会を作り替えようということにあるのである。（八木秀次『フェマルキスト』が歪める少子化対策」2000年3月号，p. 168；下線筆者）

つまり、「反共」の言説形式であるというだけでは、「バックラッシュ」言説の特性とはいえないのである。とはいえ、上記のように時代順に並べてみると、同じ「反共」の言説形式と言っても、その用法が変化していることがわかる。

澤田・中川・林の場合は、「フェミニズム」に属する行為者を指し示したうえで、彼ら／彼女らの行為が「共産主義」的であることを述べる、という用法になっている。つまり、「ネオ・マルクシズム」と結合している（澤田）、「家族解体運動」を展開している（中川）、「支配、被支配という関係」でものを見る（林）、といった「フェミニスト」の行為を、「共産主義」に喩えているのである。それに対して、八木の場合、「共産主義」と不可分であるような「フェマルキスト」という行為者を指し示す、という用法に変化している。

レトリック論では、類似関係に基づく転義（語の転用）を「隠喩（メタファー）」、類種関係（抽象名－具体名）に基づく転義を「提喩（シネクドキ）」と呼んで区別する。たとえば、「月見うどん」は隠喩、「花見」は提喩である（図6）。前者は「黄身」が「月」に類似していることに依拠しているが、「黄身」が「月」の一種というわけではない。一方、後者は「花」が「桜」の一種であることに依拠しているが、全ての「花」が「桜」に類似しているわけではない。

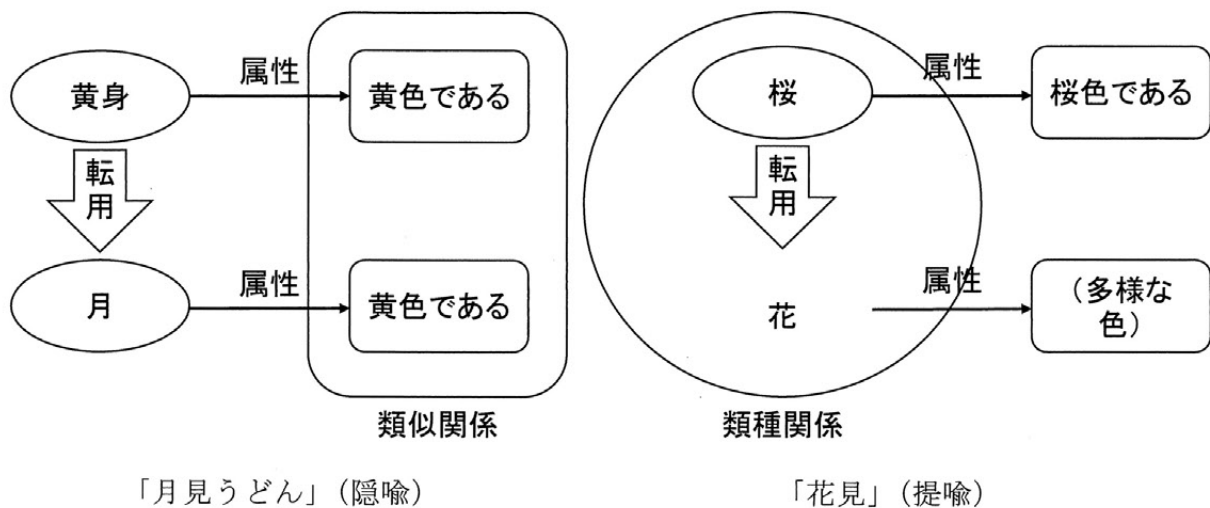


図6 転義の2つの形式

この区別を援用するならば、澤田・中川・林の場合を「隠喩的」な「反共」言説、八木の場合を「提喩的」な「反共」言説と区別することができるだろう。前者における「共産主義」は「フェミニズム」を喩える表現であるのに対して、後者における「共産主義」は「フェミニズム」そのものを指示する表現に転化しているのである（図7）。

先行研究でも指摘されていることだが、「バックラッシュ」言説においては、上野をはじめとするフェミニスト、男女共同参画条例の起案者、ジェンダーフリー教育の提唱者、性教育に携わる現場の教員といった、[互いに無関係とは言えないまでも] 独立の行為者が、

単一の「敵」として名指された。これが可能になるためには、具体名で指し示される複数の「敵」に、隠喩的な「反共」言説を差し向けるだけでは不十分である。これら行為者の主張は多様であり、類似関係だけで括ることはできないからである。一方、提喩的な「反共」言説は、たとえその主張が多様であったとしても、抽象化すれば同じ「敵」である、という言明を可能にする。提喩的な「反共」言説による「敵」の抽象化。これが 2000 年代における「バックラッシュ」言説の特性だったのではないだろうか⁷⁾。

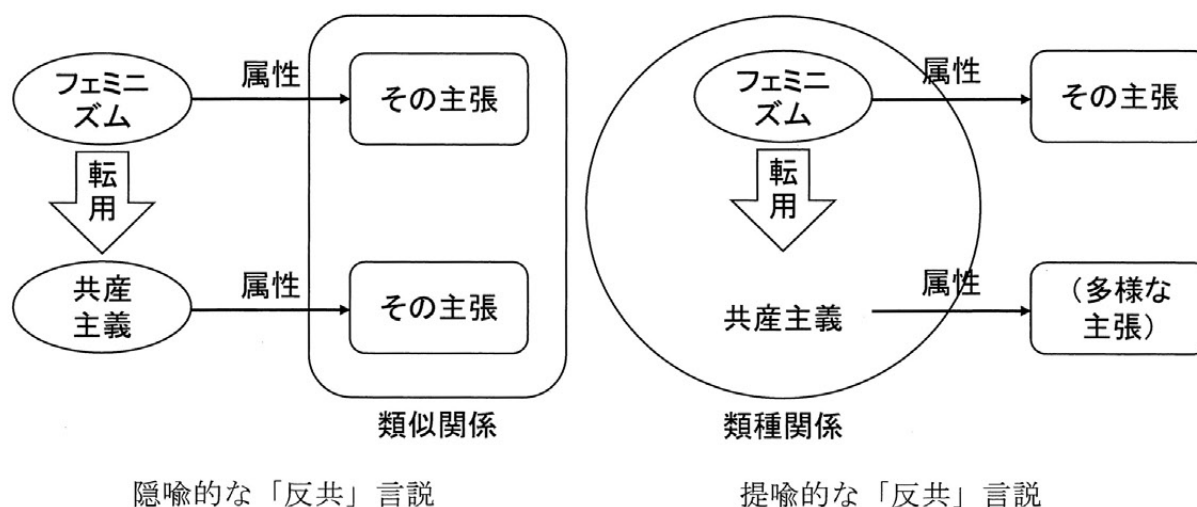


図7 「反共」言説の2つの形式

5 「敵」を抽象化するレトリックの効果

それでは、「敵」を抽象化する提喩的な「反共」言説は、フェミニスト／保守論壇の双方にとって、どのような効果を持っていたのであろうか。

フェミニストの側からみた場合、「敵」を抽象化するレトリックは、応答責任の所在を曖昧にし、対話の可能性を閉じる効果を持っていたとおもわれる。「バックラッシュ」言説の個々の論点については、その論点に応答責任のある論者が存在するだろう。だが、マルクス主義フェミニズム、男女共同参画条例、ジェンダーフリー教育、性教育といった論点の全てについて応答責任を負う、抽象的な「フェマルキスト」は存在しないのである。

『諸君!』において、この効果は、誌上論争の欠如というかたちであらわれている。『諸君!』は「南京事件」のようなトピックについても、「まぼろし派・中間派・大虐殺派 三派合同大アンケート」(2001年2月号)をおこなうなど、ある程度は誌面のバランスに配慮した編集をおこなっていた。フェミニズム関連記事についても、1980年代には男女雇用機会均等法をめぐる誌上論争と対談を、1990年代には林と田中の誌上論争を掲載している。だが、「バックラッシュ」言説については——2003年には上野の対談を掲載しているにもかかわらず——まったく対抗言論を掲載していないのである。

さらに、「敵」を抽象化するレトリックは、保守論壇の側にとっても、一定の効果を持っていたとおもわれる。その効果について考えるため、フェミニズム関連記事に対する読者欄の反応をみてみよう。

図8は、フェミニズム関連記事の件数とあわせて、その件数の推移をまとめたものである。フェミニズム関連記事の総数が73件で全体の約1.4%、読者欄の反応は38件で全体の約1.7%なので、読者の反応はむしろ良い方である。だが、その推移をみると、1985年前後のフェミニズム関連記事(働く女性)に対する反応が、2000年代の「バックラッシュ」言説に対する反応よりも大きかったことがわかる。

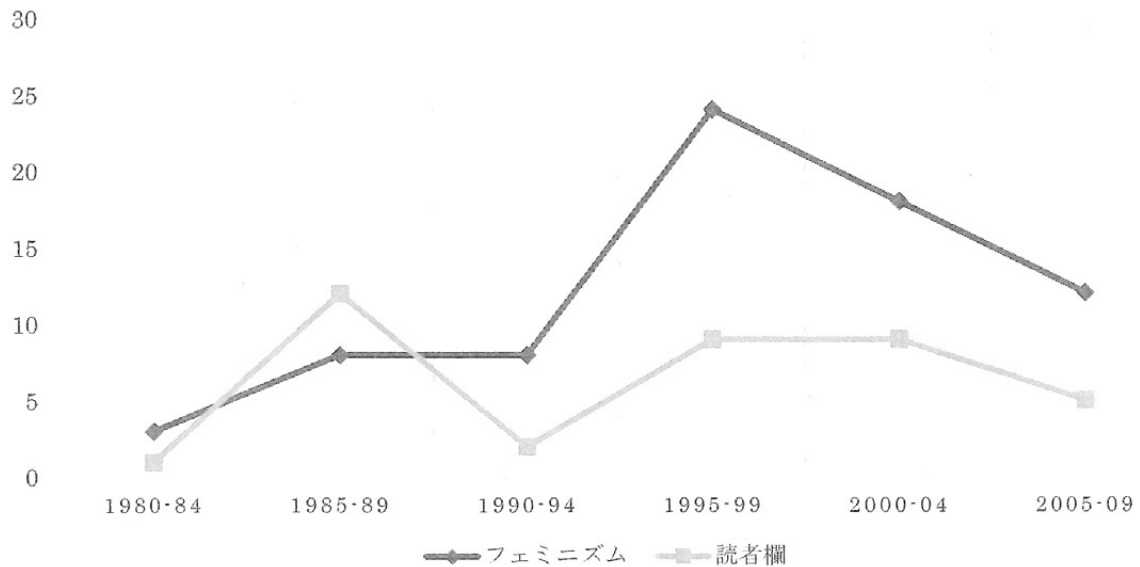


図8 『諸君!』フェミニズム関連記事に対する読者欄の反応の推移

1980年代、「働く女性」をめぐるのは、読者欄を介して活発なやりとりがあった。その典型は、千葉敦子の「ニューヨークの燃える女たち」(1986年5月号)に対する反応にみられる。この論文は、働く女性の「燃え尽き症候群」をレポートしたものだが、これを女性の社会進出の弊害を指摘したものと理解したある読者が、「燃える女への警告」という投稿をおこなった。だが、むしろ千葉の論点は、女性に家庭責任を負わせたまま、その社会進出を促すことの弊害を指摘することにあった。そこで、著者の千葉自身が、「女性は社会進出すべき」という応答を読者欄に寄せた。この応答に、さらにほかの読者が応えて千葉を批判するなど、読者欄の反応が持続したのである。

一方、「バックラッシュ」言説に対する読者欄の反応には、そのような持続性がみられない。図8は、フェミニズム関連記事に反応している投稿をすべてカウントしているので、件数としては一定の水準を保っているが、内容的に「男女共同参画」「ジェンダーフリー」「過激な性教育」に反応しているといえるのは、6件のみである。しかも、その反応はフェミニストの主張を批判するものではなく、抽象的な「敵」の存在を前提に、保守的な価値を再確認し、「味方」に呼びかける内容になっている。たとえば、以下の投稿は、八木の「フェマルキスト」論文に反応したものであるが、特定のトピックについて、フェミニストの主張を批判する内容にはなっていない。

三月号の『フェマルキスト』が歪める少子化対策(八木秀次氏)を読み、少子化問題に対

する正鵠を射た意見に深く共感した。

私は七歳、五歳の二児の父親である。妻は専業主婦をしており、趣味の文筆活動をしながら家庭円満のために前向きな暮らしをしている。

その妻も一歩外へ出ると同性から「日中何をしているの?」「勤めはどちらで?」と聞かれ「主婦」と答えるのが肩身が狭いと述べている。

最近長男が軽いいじめに遭った。長男は帰ってくるなり妻に「ぼく、いやだよ」と詳細を語った。妻はすぐに学校の連絡帖に記載した。

担任の先生も速やかに対応したため、いまでは加害者の子供もうちに遊びに来ている。自分が主婦として心に余裕があったから、子供の変化にすぐに気が付けたといった。

妻も以前はパートに出ていた。その頃は分刻みであれこれこなし子供の心理状態を見ることなどとてもできなかったと述懐している。

マルキストは子供の心理まで社会制度でフォローしようとしているのかも知れないが、人間の心はそんなに単純には出来ていない。(愛知県・33歳・会社員「フェマルキストは知らない」『諸君』2000年4月号, p. 312)

「保守」と一口にいっても、本来その主張には多様性がある。たとえば、夫婦別姓をめぐる論争にしても、「伝統的な家族」の価値を掲げる者が、必ず「夫婦同姓」という主張に至るわけではないし(実家の姓を存続させるため夫婦別姓を望む場合もありうる)、逆に、「夫婦別姓」を否定する者が、必ず「伝統的な家族」の価値を掲げるわけでもないだろう(実際、八木の反・夫婦別姓論に賛意を示しつつも、「伝統的な家族」の価値については懐疑的な投稿もあった)。

つまり、反フェミニズムという論調を共有していても、働く女性や夫婦別姓といった特定のトピックについて語るコミュニケーションが持続すれば、その多様性が顕在化するリスクを保守論壇は持っているのである。だが、抽象化された「敵」について語る「バックラッシュ」の言説形式であれば、そのようなリスクをやり過ごすことができる。

6 結論：今後の課題

その担い手が多様であるにもかかわらず、「バックラッシュ」言説が一枚岩の勢力として自らを構成し得たのはどのようにしてなのか。とりわけ、その構成にあたり保守論壇がどのような機能を果たしたのか。これが本稿の問いであった。

『諸君!』の通時的分析から、いまやつぎのように答えることができるのではないだろうか。つまり、保守論壇は「敵」を抽象化する提喻的な「反共」言説を提供することにより、「保守」の多様性を潜在化する機能を果たしたのである。

『諸君!』『正論』を通時的に分析した上丸洋一(2011)は、冷戦終結後、侵略戦争を否定する「右派」へと保守のアイデンティティが再構成された結果、保守論壇がかつて持っていた言論の幅が失われたとしている。提喻的な「反共」言説の宛先として、2000年代にフェミニズムが選択されたのも、そのようなトレンドと無関係ではないだろう。本稿では、他のトピックとの関係において、反フェミニズム言説が占める位置を検討できなかった。

今後はその点を掘り下げて分析していきたい。

【注】

- 1) 規模が大きい雑誌記事索引としては、このほかに、日外アソシエーツが提供する「magazineplus」がある。これは「雑索」のデータに他の雑誌記事索引を追加したデータベースであり、「雑索」に採録されていない雑誌を扱う場合は必要になるが、本研究では利用しなかった。なお、「雑索」「大宅」「magazineplus」の比較については、菊池(2005)を参照。
- 2) 「雑索」や「大宅」の検索結果に比べて件数が少ないのは、対象期間が約10年短いことに加えて、①同一のテーマで複数の論者が短文を寄せる「アンケート特集」の記事、②複数の短いインタビューをまとめた「インタビュー構成」の記事、および、③同一テーマの連載記事を、それぞれ「一件」として集約したためである。たとえば、内藤国夫による「月報 創価学会問題」は、161回におよぶ連載記事であるため、これを「一件」と数えるか否かによって、集計結果が大きく変わってくる。今回は誌面構成のおおまかな推移を描くため、件数を集約した結果を用いた。これらを集約せずに分析した結果については、別稿を期したい。
- 3) 各国の政治家や知識人に言及している記事は、その国に関連する記事として数えた。また、歴史認識に関わる記事のうち、特定の国名との結びつきが強いものも、その国に関連する記事として数えた。たとえば、「真珠湾」はアメリカ、「南京」は中国、「慰安婦」は韓国といった具合である。ただし、「東京裁判」と「靖国神社」については、表題やリードで国名があがっていない限り、カウントしていない。
- 4) 各党の政治家に言及している記事は、その政党に関連する記事として数えた。そのため、歴代首相に関連する記事の多くは「自民党」関連記事として扱っている。
- 5) 表題やリードに性別が示す語彙が含まれる記事、たとえば、「夫婦」や「父母」といった語彙が含まれる記事を、それだけで「フェミニズム」関連記事と数えることはしなかった。「売買春」についても同様に扱うことにし、たとえば、「援助交際」に関する記事は、「フェミニズム」関連記事から除外している。
- 6) 『朝日新聞』だけではなく、朝日新聞社が発行している雑誌（とりわけ『朝日ジャーナル』と『論座』）や、テレビ朝日（とりわけ久米宏の『ニュースステーション』）に言及している記事も、「朝日」関連記事として数えた。また、筑紫哲也の『NEWS 23』はTBSであったが、筑紫が朝日新聞社出身であることをふまえて、「朝日」関連記事に数えた。
- 7) 提喻につかえる語彙は、「共産主義」だけではない。『諸君！』における反フェミニズム言説の場合、「カルト」のような宗教に関連する表現も1990年代から隠喩的に用いられており、「バックラッシュ」言説においては「敵」を抽象化するレトリックとして機能している。そのほか、等価な機能を果たしうる語彙としては、「反日」があげられよう。

【文献】

Faludi, S., 1991, *Backlash: The Undeclared War against American Women*, New York: Crown. (=

- 1994, 伊藤由紀子・加藤真樹子訳『バックラッシュ——逆襲される女たち』新潮社.)
- 長谷川三千子, 1984, 「『男女雇用平等法』は文化の生態系を破壊する」『中公公論』99(5): 78-87.
- 林道義, 1998, 『主婦の復権』講談社.
- 伊田広行, 2006, 「バックラッシュの背景をさぐる」日本女性学会ジェンダー研究会編『Q&A 男女共同参画／ジェンダーフリー・バッシング——バックラッシュへの徹底反論』明石書店, pp. 176-86.
- 上丸洋一, 2011, 『「諸君!」「正論」の研究——保守言論はどのように変容してきたか』岩波書店.
- 菊池しづ子, 2005, 「一般誌を対象とする記事索引の現状」『学習院女子大学紀要』7: 21-33.
- Mertz, T. J., 2005, “Antifeminism,” M. C. Horowitz ed. in chief, *New Dictionary of the History of Ideas*, Detroit: Charles Scribner, 94-98.
- 西尾幹二・八木秀次, 2005, 『新・国民の油断——「ジェンダーフリー」「過激な性教育」が日本を亡ぼす』PHP 研究所.
- 田中喜美子・鈴木由美子, 1999, 『「主婦の復権」はありうるか。』社会思想社.
- 和田悠・井上恵美子, 2010, 「『産経新聞』にみるジェンダーバックラッシュの発想と論理」『インパクション』174: 72-80.
- 八木秀次・宮崎哲弥編, 1996, 『夫婦別姓大論破!』洋泉社.
- 山口智美・斉藤正美・荻上チキ, 2012, 『社会運動の戸惑い——フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』勁草書房.